

■ 書 評



誰か風を見たか 増補版 —ある精神科医の生涯—

臺 弘 著

星和書店

2015年5月 480頁

本体価格 3,800円+税

古来、「風」という言葉は眼に見えないものの象徴として使われてきた。

1913年から2014年までの100年間を生きた精神科医の回顧録『誰か風を見たか』の本扉には、イギリスの詩人、クリスティーナ・ロセッティの『The Wind』という詩が記されている。

Who has seen the wind?

Neither I nor you :

But when the leaves hang trembling

The wind is passing thro'.

叙情的で哲学めいており、どこか厭世観を感じさせるもする詩である。西條八十によって訳された童謡『風』は、セツルメント運動の中でよく口遊まれ、松沢病院の患者コーラス・グループでも唄われたという。近年の、残酷で美しい宮崎駿の映画『風立ちぬ』の中で、「誰か風を見たでしょう」と、この詩を呟きながら紙飛行機を空へと飛ばす主人公に、若き日の著者の姿を勝手に重ねた。

「風」の名を冠した作品は、どこか寂しげで超然としたデタッチメントを感じさせるものが多い。80歳で上梓された自伝に晩年の仕事を追加し、一周忌を記念して出版された本書も御多分に漏れず、激動の時代を鳥瞰するように物語る。

精神科医が自らを振り返る生活史からは、軍医としての戦争体験が人生に多大な影響を与えたことがありありと見て取れる。室蘭から青森に渡る幼少期の想い出を呼び起こす汽船の匂い。一晩かけて書き上げた、「校風」への迎合に対決した作文と自我の目覚め。「赤い'30年代」に多感な青春を過ごし、精神科医としての研鑽の開始、兄の自死、「誠実だったつもりだが、よそよそしい夫婦に見えたのだろうか」と内心苦笑)し

た結婚を経た青年は、『魔の山』のような戦地へと召集される。敗戦の色濃い終戦間近のパラオで、煙を見た敵機に射ち込まれぬよう「戦死者の小指を第二関節から落として」火葬した後に小さな木の墓標を立て、深刻な飢餓の中で隊員の摂取カロリーと体重減少の速度から破滅時期を概算し、体重の少ない者を摘み食いのできる炊事要員に軍医として選任しながら、自身は闇米を食べて生き延びた欺瞞を告白する《必要があった》。

敗北を抱きしめ、「生あり、死あり」の境地に立った男は、後に『体制』側として大学・学会紛争を経験する。運動に対して「進歩が無い」「戦争ごっこ」と嘆息するデタッチメントは、『反体制』をさぞ苛立たせただろう。死が生の特極に位置するのでなく、半歩向こう側にひろがる死の世界と共に生きた人は、時代を吹き抜ける熱風の中に何を見たのだろうか。

家族の自殺、戦争、結核、闘争と、人間の価値観を揺るがすいくつもの分水嶺を越えた医師は、宿命のように統合失調症の生活療法と病態解明へと心血を注ぐようになる。定年後は町に出て、生き辛さや生活の苦勞を抱える人々との対話を続けた。

齢90を過ぎてひとり黙々と哲学書を読みすすめ、「時間」について考え、精神機能を可視化する旅の最中、彼は『メビウスの輪』の内外・表裏の連続に、妄想と現実、病と生理の主観的な連続性を見た。精神の症状ではなく機能を診るため、そして身体の検査項目のように一般に目で見てわかりやすいようにと、「知・情・意・創」の基礎機能を示す『簡易客観的精神指標検査 (UBOM : Utena's Brief Objective Measures)』を診察室で用いた。永遠に生きるかのように学び、創意工夫を試みて、静かに去っていった。

数年前に癌で他界した、「あの戦争」の生き残りの祖父の穏やかな死顔を思い出した。臺氏よりも年少であった祖父は、戦争体験を価値判断なく淡々と書いた手紙を残した。戦友を弔い、その代わりに偶然生きることになった自らの長い「おまけの人生」の物語の最期に、「広く書を読み、見聞を広めてください」とだけ記して逝った。価値判断をしなかったのではなく、戦後60年余を生きてまでも《できなかった》のだろう。

風の歌が聴こえるような、静かで孤独な時間の中で頁をめくることをお勧めしたい一冊である。

(熊倉陽介)